

判断価値の説明1

文章分析では、一般に言われる価値観を、価値観と判断価値に分類している。価値観は安定した判断基準であり、判断価値は、大きく変化しないが、対象や目的に応じて細かく揺れ動く。但し、生活環境や立場に応じて、判断価値は変化する。

判断価値は、価値観を基にして構成される。判断価値は正負の二つに区分した。

判断価値(価値基準項目)		
CD	正 0~3	負 4~9
1371 活動基盤価値		
1351	健康	不健康
1352	成長	未熟
1353	ゆとり	緊迫
1372 生活基盤価値		
1354	利便性	不便
1355	安定性	不安定
1356	豊かさ	まずしい
1373 内的価値		
1357	快感	不快
1358	優越	劣等
1359	感動	落胆
1374 理論価値		
1360	証明理論	論理不能
1361	選択理論	不定
1362	反価値	—

《活動基盤価値》 人が社会で活動していくために必然とする要素群で構成される価値である。

●健康—健康であり続ける、より健康になるための要素、条件、行動があげられる。健康の意味として身体の健康、精神の健康があり、これらを維持、発展させるために選択する要素がたくさんある。食事、食材、調理、運動、薬、予防薬、生活環境、活動リズム、空間、自然との調和、働き方の調整等々がある。また、人間関係などでストレス要因を除く行動も含まれる。

⇒【関係する価値観】 原則性価値観の4種類、心情価値観、目的定立価値観。使命性価値観を強く持っている場合、生きる意識が強くなり、健康促進が促される場合が多い。

●成長—成長には、人格的成長、知識的成長、身体的成長、精神的成長、関係認識的成長等々がある。成長意識、成長への価値判断には、目的となる対称と、到達レベルが必要である。成長させる内容と目的を組み合わせる。目的が社会共通認識の場合もある。

⇒【関係する価値観】 風土性価値観、正統性価値観、および形成思考価値観

●ゆとり—個々の現在の生活スタイルが判断する始点になる。見聞できる環境及び生活環境が目標になり、その目標に近づいてゆとりとする場合が多い。「ゆとり」「余裕」を同義として扱える。精神的ゆとりは安心感と同義として扱える。「豊かさ」へと展開されていく。

⇒【関係する価値観】 習慣性価値観、正統性価値観、心情的価値観

《生活基盤価値》 活動の基本単位で、活力を構成する要素群である。

●利便性—生活、仕事、余暇等々の思考と行動に対しての利便性の条件を取り出す。現状の状態を始点とし、より便利になる方向へと向かう。不便さを感じているものに対しての利便性は効果が速く現れる。予期していない利便性の効果は驚きと喜びを持って迎えられやすい。

⇒【関係する価値観】 習慣性価値観、正統性価値観、心情的価値観、目的定立価値観

●安定性—安定に寄与する要因、材料、明日に対しての確信があげられる。変動の激しい生活や職場、移動が頻繁ある行動に安定要素が不足する。日々と同じような行動ができる状態を示す。一般に安定が望まれるが、革新に対しては負として働きやすい。安定から創造、発明、革新も生まれやすい。革新を起こす立場と受ける立場で、安定区分が逆転する。

⇒【関係する価値観】 原則性価値観、心情的価値観、目的定立価値観

●豊かさ—物質的豊かさと精神的豊かさがある。多くの場合は経済的にとらえられている。物質的から精神的豊かさが発生する場合と逆の場合がある。定義としては、豊かさを作りだせる要因、条件、思考があげられる。但し、継続的な基準価値ではなく、状況や環境に応じて、変化する。

⇒【関係する価値観】 習慣性価値観、正統性価値観、心情的価値観、形態価値観

判断価値2

《内的価値》 思考、行動、認識等々で、個々の内面に向かって作用する要因を示す。

●快感—精神的、肉体的快感がある。環境に影響される快感、人間関係で発生する快感等々がある。自身のみで味わう快感、みんなで味わう場合もある。日常とは異なる行動から、通常感覚から、大きく、楽しみ、喜びに振れた状態を示す。受身の要素がある。個人にとっての快感が、多数の他者からみた不快、嫌悪は、快感とはしない。

⇒【関係する価値観】 原則性価値観、心情的価値観、形成思考価値観

●優越—他と比べて、自身が優れている認識できる要素、条件、環境を示す。自身が他に対して自慢または誇りを持てる状況を示す。比較し優れている内容や分野に区別はない。一つでも得意とするものに優越性を求める場合もある。自ら作り出す優越性、他から与えられる優越性がある。

⇒【関係する価値観】 習慣性価値観、正統性価値観、心情的価値観

●感動—受身的な情感である。なかなか起こりえない情景、状態、他の行動に対して揺さぶられるように共感する。期待して、期待にそぐわなければ落胆になる。前提があって落胆があるが、感動を予想する材料は少ない。結果として現れる正に向かう情感である。

⇒【関係する価値観】 習慣性価値観、正統性価値観、心情的価値観、形態価値観

《理論価値》 理論を組み立てるために必要とされる要素、条件を示す。

●証明理論—定義、公理、定理、または確かな根拠をもって組み立てていく要素を表わす。定義、公理等は証明理論に含まれる単語である。形態、体系、行動プロセスを適正化する思考要素を示す。

⇒【関係する価値観】 正統性価値観、知識器体系価値観、形態価値観

●選択理論—是非区分、目的、正統とされる要素や形が明確化され、行動や思考のための材料を認識する要素、材料を示す。方向性が明確化された上で、認識されている多数の事柄から選択する要素等を示す。

⇒【関係する価値観】 習慣性価値観、正統性価値観、形成思考価値観

●反価値—全ての事柄に対して、モノについて、思考について、状態について、無価値なものはないとする考えが適切である。意味があるから存在したとする。対して、思考、精神、理論において対象外となるものを反価値と言う。意識外は反価値になる。単語単位で意味定義では、正負の両方の意味に変化するもの、感情や価値観を規定できないもの、不定、不能を示す。

⇒【関係する価値観】 不定

※価値観等の枠組みの設定 価値観、基準価値、欲求には、個人、組織、国家、社会、コミュニティのそれぞれにある。個人を除く価値観等には、正統性及び風土性が大きくかわってくる。価値観等の定義は組織、社会等においても定義しておく必要があり、互いの相関を検討しなければならない。但し、感情は個人のみ属するとする。